

22 木製建具の研究と試作

末吉光雄 東郷信正 櫛山和實

目的

住宅様式の変化にともなって、アール付きのドア、窓類が多くなり、その製作法について、県建具組合連合会から要望もあり、研究し試作を実施した。

概要

今回はアール付きガラリ（よろい戸）の羽根の端（木口部）の墨付け法を特に研究した。先づ展開図による墨出し法は作図により求める曲線が得られるが、その図上の曲線を如何にして現物に写すか、また写した二次曲線を如何にして加工するかが大きな問題である。

そこで当场では、一般業界に適應する加工治具の研究に取り組み、臨牀的に実験して一応の成果を見たのである。先づルーバーの角度を正確に治具にとり、その間に羽根材を挿入して、半径を定めた帯鋸盤上で切断する方法である。

成果

上記治具が正確でまた能率も良いので県建具組合連合会主催の各地区講習会にて普及し好評を得た。

なお、柄付けについては同治具を用いて表裏から墨付けは容易であるが、加工について難点があるので、研究を継続中である。

23 デザイン研究

木材の装飾性について

楠 畑 裕 也

目的

木材は合成樹脂材や軽金属材などに比較して、不均質で不安定な材料性のために、消極的な工業用材といわれている。けれども木材はその加工性のよさと共に材質の視覚的なあたたかさ、さわやかさ、ほどよい重量感や木目模様のかぎりない変化から生じる独特のあじわいをもっている。木材特有のこのような性格を、素材の含む基本的な装

飾性として解し、このことを追求することによって本当に木を生かし木材ならではの生活用具を開発できるであろう。そのため木材を次の三つの視点即ち (1) 装飾性と機能性 (2) 加飾のための装飾 (3) 純粹装飾性というらえかたで検討して形にむすびつけ、製品の設計と試作をすることがこの研究の主眼である。なお設計試作される製品は視覚的な効果だけでなく、用具としての機能的な創意をもつものでなければならない。

概要

昭和47年度より5年間のテーマであり、今年度がその最終年度にあたるので、一応打ち切りまとめにする。その間、指導作品も含めて次の製品をデザインした。（製品設計図並びに写真は省略）、また、この目的にもとづく実践行動として工芸グループを指導した。

1. (イ) カップボード、学習机、サイドボード、ダイニングテーブル、椅子、祭壇台。
(ロ) 小木工品 約130点

2. 工芸グループ「木の会」の指導育成

成果

現在は生産性の合理化のため、木材が製品製造の構成材として利用される余り、木材の生物素材としての特性が半減されている。木材は材質的に用途上の機能性を求めるより、感覚的な視点から人ともとの内面的なかかわりを重視するものの素材として受けとめれば、木製品の生活空間への応用化は今後ますます無限の可能性が開けると考えられる。

- (イ) 研究の一部を昭和48年度工業技術連絡会議九州地方工芸部会において発表
(ロ) 工芸グループ「木の会」を通して4名が自立し、それぞれ独自の木材工芸業を営むに至った。